

Y18b 地域連携を通じた教育普及・科学史調査 – 日本の宇宙開発発祥の地、国分寺市の場合

阪本 成一 (国立天文台), 大川 拓也 (宇宙航空研究開発機構)

戦後まもなく再開した日本のロケット開発は今年で60周年を迎えた。1955年4月12日の国分寺でのペンシルロケット水平試射を皮切りに、同年5月から6月にかけては千葉にあった東大生産研の施設で地上実験を実施、同年8月には秋田県の道川海岸(由利本荘市)で打ち上げが行われている。しかしながら現在は国分寺市にも千葉市にも由利本荘市にもJAXAの研究開発拠点はなく、特に科学館のない国分寺市と由利本荘市では宇宙をキーワードにした教育普及も限定的である。科学史の面でも、日本の宇宙開発黎明期の史料が十分に引き継がれず、散逸する恐れがある。そこで、人間であれば遺曆にあたるこの機会を利用して、地域との連携を図って教育普及につなげるとともに、科学史的な調査を行うこととした。国分寺市ではイベントとして小惑星にkokubunjiと命名する提案申請(2014年10月)、「はやぶさ2」打ち上げパブリックビューイング(同年12月)、2015年2月に小惑星の命名を報じるリリース、そして4月11日に水ロケット水平発射大会、12日には記念式典と講演会を実施、11日から19日にかけての企画展「ペンシルロケット60年目の待ち合わせ in 国分寺」では、存在が確認されているペンシルロケット実機ほぼすべてをはじめ、「はやぶさ」カプセルやイトカワ微粒子の展示も行った。いまや国分寺市は「日本の宇宙開発発祥の地」であることをシティーセールスの軸の一つに据え、ふるさと納税でペンシルロケットレプリカを返礼品として用意するなど、市を挙げた取り組みに広がっている。企画展を機に発見されたペンシルロケットの一つは市に寄贈され、市内の教育現場で利用されることとなった。水平試射実験の地に建つ早稲田実業学校との連携を含め、地域との連携を通じた教育普及や科学史調査の事例を報告する。